市川昔がたり⑪

【天保期の貴重な記録「市川日記」(１)】

多賀台　奈　良　孝次郎

１．〈天保期は飢饉(ききん)だった〉

市川地区に**「市川日記」**という本が残されています。書いた人は**佐々木太郎左衛門**といい、今の**向谷地町内**に住んでいました。記録された時期は天保3年（1832）から天保9年（1838）までで、農作物の不作が続き、多くの人が苦しんだ時代です。なにせ、この7年間のうち、少しよかったのは1年だけで、他は半作以下の年が続いたのです。

その頃の市川地区の暮らしをじっと眺め、事実に基づいて記録したものが「市川日記」であり、その内容の貴重さから、**青森県の重宝に指定**されています。以下はその内容の紹介です。

２．〈生きる手立てについて〉

日記の中には、生活の大変さだけでなく、その中にあっても生きるために工夫したことも書いています。例えば、いろいろな**具を利用して草もちをつくっている**ことです。**イネもち・松皮もち・わらびもち**などがありますが、中に**いわしもち**があります。作り方は、生のいわしをペースト状にして、それに麦粉などを混ぜ、手の平状にして煮て、味噌をつけて食べます。こうして作ったもちは、**百石**へもっていき、売ったりしました。

また、冷害の中でも育つ作物に**じゃがいも**があり、これをどのような手順でつくるか、多くとるためにどのような工夫が必要か、図を書いて説明しています。それでも多くの人が飢え死にし、人口も減っていきました。（以下次号へ）

石碑をたずねて⑤

1. 名　称　「開墾記念碑(かいこんきねんひ)」　　陸奥市川　鈴木　亮

2. 場　所　八戸市大字市川町字南尻引
（旧藤田屋敷付近の旧国道45号線沿い）

3. 内　容　江戸時代後期の開拓者「**藤田又右衛門・父武兵衛の開拓の功績**を讃えた碑」
（詳しくは「市川を調べる」5号と9号に記載済です。）

4. 現在地に移転した縁者の思い

この碑は元々は現在の地に建立されたものではなく、旧国道45号線から主要地方道橋向・五戸線を轟木小学校に向った赤畑地内（旧役場）にありました。

大正5年に、市川村神明川原普通水利組合が建立した碑を藤田家の分家筋に当たる藤田行雄が昭和43年に土地を提供、叔父に当たる鈴木長四郎が移転の費用を寄付したもので、そのことが碑の裏面に記載されて居ります。

この移転は、石碑の内容及び由来を一人でも多くの方々に認識していただきたいという願いからだったと私は思っております。

※藤田行雄は私の従兄弟、鈴木長四郎は叔父に当たり、二人から聞き及んでいた事の一部分を文書にさせて頂きました。

＊資料:「百石町誌」　　（写真 ；鈴木亮、木村隆一）